

## 札幌における中心商店街の構成(1)

沼 田 武\*

札幌の中心商店街については、都心部の土地利用分布を定量的に分析した阿部隆による研究<sup>(1)</sup>や、土地利用の集約性を形態的特性から捉えた建築物の高層化の状態、及び小売、飲食、娯楽機能の集積などを仙台市との比較で分析した鈴木泰到の論文<sup>(2)</sup>、あるいは、札幌の都心部の丁条区画ごとに、業務、官公署、商業、工業などの主要土地利用を選定した木内信蔵の地域区分に関する研究<sup>(3)</sup>のほか、いくつかの都心地域の研究がある<sup>(4)(5)(6)(7)(8)</sup>。

本稿では現地調査に基づき、第1段階として中心商店街を構成する各種の専門店、商社の立地集積状況を微細的に把握することを目的とし、その一部を若干の図によって示した。今回は、多くの店舗が入居するビジネスビルや、地下商店街の業種別立地については未調査のため扱っておらず、おもに専門店化した平面の独立店舗を取りあげるに止まった。

基図は現地調査の便宜上、住宅地図<sup>(9)</sup>を使用しているため、建物区画、位置関係、距離などは必ずしも正確でなく、各分布図は概要図として作成したものである。

中心商店街地域として扱った範囲は、南1条（一部大通を含む）から南4条（一部北側のみ）の、西1丁目から6丁目までの24丁角である。ただし、札幌の中心商店街としての地域は、今後調査予定の隣接する丁条区画の地域構成を捉えることによって明確になるものと考えており、一般住宅のほとんどみられない当該地域は、中心商店街の核心部を構成するものとして扱った。また、南3条から南4条の部分については、拙稿、「建物業種からみた薄野の地域構造」<sup>(10)</sup>の中でとりあげた地域と重複しているところがあり、また、店舗構成業種については、杉村暢二による「中心商店街の

店舗構成業種区分」<sup>(11)</sup>などを参考にした。

中心商店街を構成する店舗業種のうち、第一に特色をもつのは、洋服、服地、洋品、呉服、服飾などの高級衣料関係業種である。図1は、各街路に面した主要衣料店舗を示したものであるが、商社ビルやデパート、寄合百貨店などに入居する店舗は含まれていない。例えば、南4条通に南面する西4丁目松岡ビル1階に呉服店えり善真木、とくせん真木、京呉服さい藤の各呉服店が並ぶが、このビルは料飲店の占める割合が85%（入店舗27店中23店）を示すため、料飲店ビル（図3）に分類して図示した。

衣料専門店は狸小路に面して集積傾向が強く、西2～3丁目に、さとう洋装、赤塚、大万、竹内呉服店、松屋、シリヤンなどが立地し、西1丁目に集積する衣料品店の大部分は古着、質流れ品などを扱う店舗になっている。南1条西2、3丁目の高級衣料品店立地は、服飾デザイナーの作品展示、販売のデザイナーズ・ブランド店が主で、1月にオープンの3丁目松井ビル、キャパ(Capa)は、地下1階、地上8階の全店が、各階1店のブランド店で構成されて、デパートのインショップとともに高級婦人服指向の顧客店舗の性格をもっている。

次に、高級専門店業種として買廻品の時計、貴金属、眼鏡、楽器のほか、カメラ、ミシン、神仏具などの店舗をとりあげることができる。最寄品としての靴、履物店も、中心商店街に立地する専門店をとりあげて図2に示した。札幌駅前通をはさむ狸小路商店街と、南1条通に面して集積する特色がみられるが、この図にも、デパート、商社ビルの入店舗は未調査のため除外してある。

札幌草創期における狸小路の中心地は1丁目であり、現在もゆあさ神仏具店、あべ靴店、矢口、加藤時計、宝石店などが立地しているが、狸小路中心部の3～4丁目には大賞堂、マキノ、富士、

\* 北海学園大学講師（非常勤）

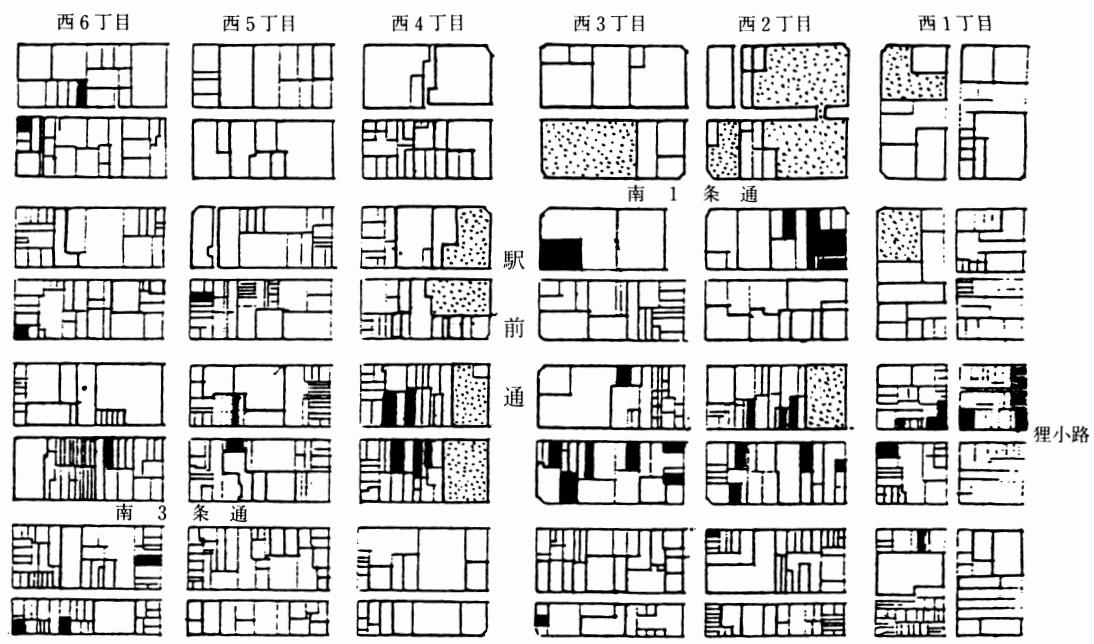


図1 ■ 洋服・服地・洋品・呉服・毛糸・服飾など ■ デパート, 寄合百貨店  
(昭和61年1月)

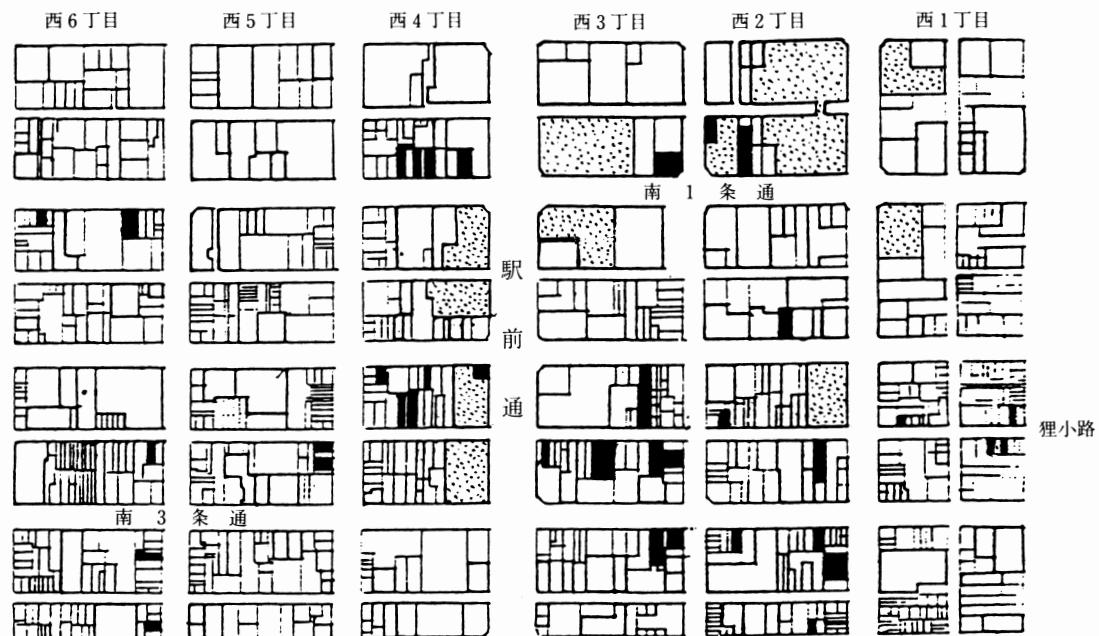


図2 ■ 時計・宝石・眼鏡・楽器・カメラ・ミシン・神仏具・靴 ■ デパート, 寄合百貨店  
(昭和61年1月)

増永、5丁目のマリヤ、徳永などの時計、宝石、眼鏡の専門店舗が並び、狸小路が中心商店街の中軸としての性格をもつことを示しているといえよう。南1条通には、グラフ商会、メガネパレス、梅沢、かさはらなどカメラ、眼鏡、時計、楽器店が西4丁目に集積するほか、西3丁目にアメリカ屋2丁目にイワイ靴店、ため楽器店が立地する。その他、南3条通に面する西3丁目にプラザー、中山ミシン、東に面して藤田眼鏡店が、西2丁目に奥山、善光堂の仏具店の立地がみられる。

中心商店街は、都市の中で人が最も出合う盛り場であり、ショッピング関係店舗に付随して飲食関係とレジャー店舗が集積する地区である。料飲、やきとり、寿司店など一般に酒食を伴う店舗と、レストラン、中華料理店、そば屋、喫茶店、菓子販売店舗と、食料品、果物、茶販売店の立地の傾向を示した図3では、飲食、食料といった店舗の性質から、中心商店街の南1条以南に散在立地するが、狸小路から南3条を中心とする地区に集積する傾向が明らかである。このうち南3条通以南に料飲店、スナック、バーなどが多くみられるのは、薄野地区の北部の料飲、娯楽ゾーンの拡大が南3条を中心とした地区に及んだ漸移的性格をもつ地域であることを示している。

また、この地域の中で南3条通を中心とした喫茶店の集積は特色をもっており、ユニークな店舗が多いことでも若者、観光客に知られ、約50店が西5～6丁目を中心に立地する。しかし、商社ビルに含まれる店舗が比較的多いため図中には殆んど示されていない。最近、札幌の「たべ歩き」に関する数種の書籍も出版されて、観光客が探し歩いているのを散見するが、中心商店街が札幌市や札幌圏の顧客地域であるのみならず、観光客に対しても代表的な都市の顔である以上、ショッピングと並んで、味覚の上でも個性をもつと強調した店舗の立地が望まれる。

金融、保険関係の独立店舗と、入店舗の商社ビル及び、不動産斡旋業、質店関係の立地を示したのが、図4である。大通以北の官公署、業務街に介在集積する金融関係店舗に対して、中心商店街では数が少ないが、大通をはさむ南側の西3、4丁目中通り以北に大手の金融機関が凝集立地するほか、中小企業関係の金融を主に扱う店舗の介在

もみられる。質店、斡旋業などの店舗は、狸小路の東部に数店がみられるに過ぎない。

中心商店街が遊びの要素を組み入れていることは、パチンコ、ゲームなどの遊戯場、映画館、マージャン店の立地が多いことでも裏付けられ、図5はレジャー店分布を示したものである。これらは、薄野歓楽街の地域構造区分のうち、外食、娯楽ゾーンとした南2条通以南の地域にほぼ重複して集積する。盛り場のメイン指標として捉えられる映画館は、数こそ減少したものの、現在なおこの地域における娯楽要素の中心的役割をもち、全市38館中、図の範囲に27館、71%をしめ、うち、狸小路に面する映画館がその30%にあたる。南3条西1丁目須貝ビルには8館が入館して映画館ビルとなっている。

中心商店街の北半には金融関係店舗も含むビジネスビルが図6のように集積する。異業種の混在するビルは、西4丁目以西に比較的多いと考えられるが、その立地、集積状況は今後の調査によって明らかにしたい。また、南2～3条、西5～6丁目には住宅、マンションビルの立地が目立っており、西4丁目以西の一般ホテルの増加傾向と合わせて、中心商店街地域の多様化と変質現象があらわれている。例えば狸小路の場合、初の本格的ホテル（サンルート、ニコ・札幌）の着工や、周辺のマンション建設を機に、再開発によって西6丁目「狸小路プラザ」、西4丁目に「キッチン・プラザしみず」などがオープンしたほか、新しいショッピングビル化の動きが目立っている。

業種区分では、他に最寄品の薬品、化粧品店、電気器具、玩具、家具店などの立地にも特色があると思はれるが、本稿では省略した。また、理容店の減少に対して、美容店の増加傾向も、新しい中心商店街の顔として捉えることができるであろう。

本稿で指標とした中心商店街の主要店舗は、前述のごとく商社ビル・デパートなどに入店舗の分は除いてあるため、実際の構成を示すには不十分である。従って今後は店舗業種の垂直的な分布と、地下商店街店舗分布を加えた構成分布を具体的に表わす必要があるが、一応作成した分布図からは、洋服・服地・洋品などの衣料専門店、遊戯店、映画館などのレジャー店、時計・宝石・楽器・眼鏡



図3 料飲・やき鳥・すし 飲食・喫茶・菓子 食料品・果物・茶  
(昭和61年1月)

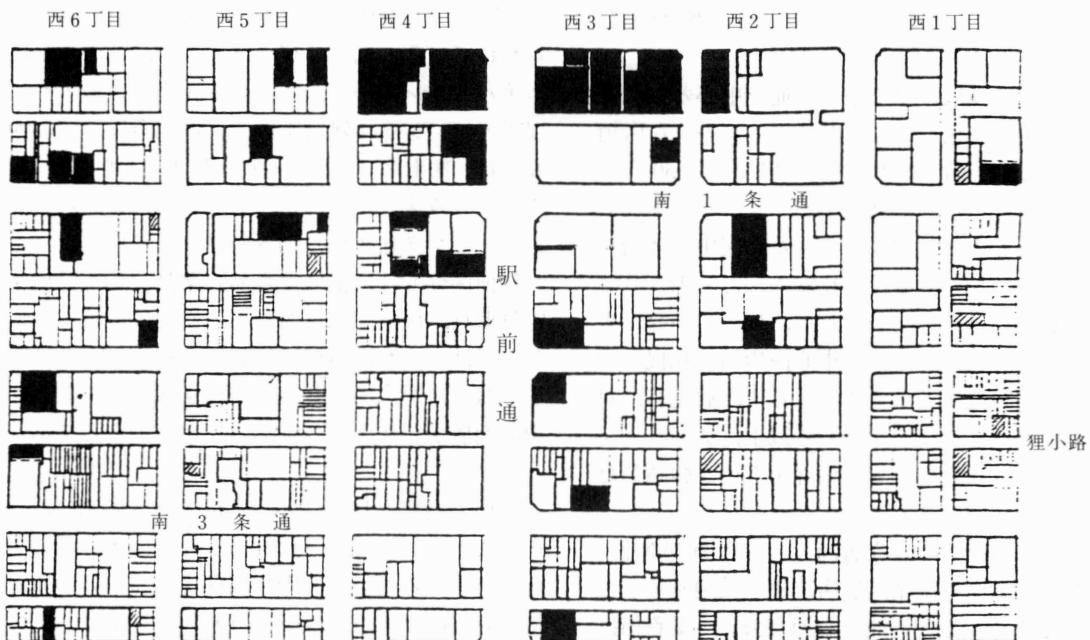


図4 金融・保険 (入店舗ビルも含む) 不動産・質店 (昭和61年1月)



図 5 ■ パチンコ・ゲーム・映画・マージャン ▨ 運動具店 (昭和 61 年 1 月)

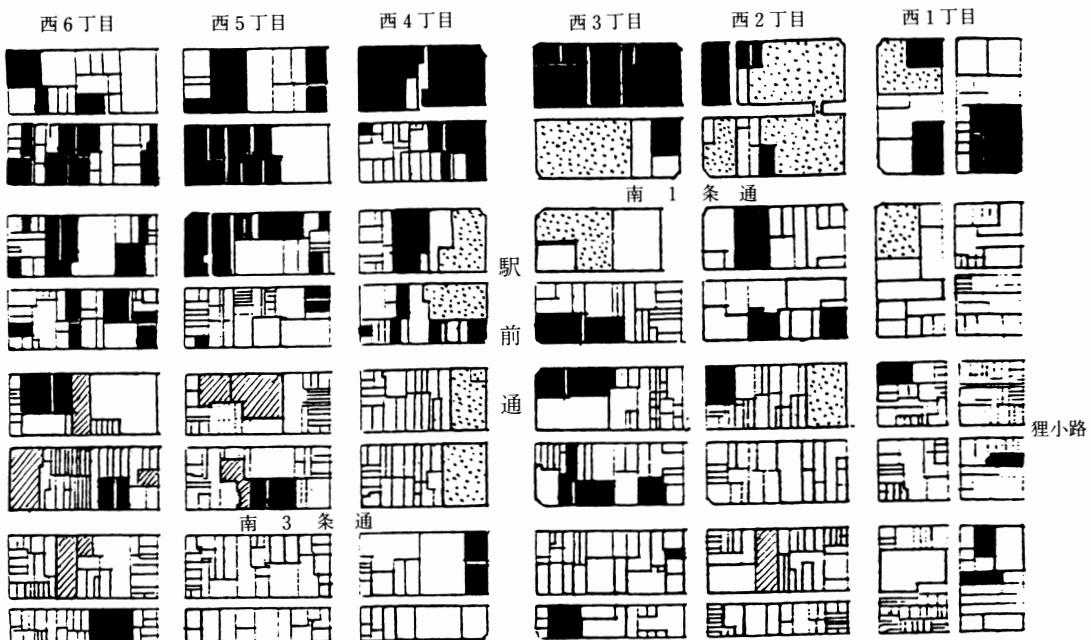


図 6 ■ ビジネスビル (金融関係店舗も含む) ▨ 住宅ビル □ デパート・寄合百貨店 (昭和 61 年 1 月)

などの高級買廻品専門店などが狸小路商店街を中心として集積し、南1条を中心とした地域には、デパート、高級衣料品、時計、貴金属、及び金融関係店舗が、南3条以南には飲食、喫茶、料飲店が集積して中心商店街の構成を特徴づけている。

冒頭にも述べたように、本稿は中心商店街地域として一応設定した範囲の、平面的な店舗立地状態を図示したに過ぎない。しかも筆者の浅学により、見落しや、誤記もあるものと考えられる。これらの点や、第2段階への考察のすすめ方などについて、御教示、ご批判をいただければ幸いである。

#### 参考文献

- (1)阿部隆(1983)：広域中心都市の都心部の土地利用(要旨)：東北地理 Vol. 35 No. 1
- (2)鈴木奏到(1981)：都市中心部における土地利用の集約性について—札幌、仙台を例に—：東北地理 Vol. 33 No. 3
- (3)木内信蔵(1979)：都市地理学原理(第4章、第4節 地域区分 p.p 133)：古今書院
- (4)柏村一郎、山本博信(1970)：札幌の地域構造の発達：地理学評論 Vol. 43 No. 2
- (5)内田実(1972)：百万都市札幌：地理 Vol. 17 No. 10
- (6)阿部隆(1976)：土地利用の混合構造—計測と分析—：東北地理 Vol. 28 No. 4
- (7)実清隆(1977)：札幌市における都心および周辺地域の構造とその変動のメカニズム(要旨)：地理学評論 Vol. 50 No. 3
- (8)杉村暢二(1977)：中心商業地(p.p 198～210)：古今書院
- (9)せんりん：住宅地図 1985年版中央区
- (10)沼田武(1985)：建物業種からみた薄野の地域構造：北海道地理 No. 59
- (11)杉村暢二(1975)：中心商店街(p.p 55)：古今書院